



COVID-19をめぐる「権威メディア」と「隠された声」：現代民俗学の視点から

著者	周 丹
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	135
ページ	119-124
発行年	2020-10-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029134

COVID-19 をめぐる「権威メディア」と「隠された声」*

——現代民俗学の視点から——

周

丹**

本論文では、民俗学の視点から中国における COVID-19 とメディアとの関りについて分析する。ここでいう民俗学とは、「霸権的、あるいは公式的な制度とは異なる次元における人間の生のあり方に着目することで、霸権、公式、普遍、主流、中心とされる側の基準によってつくられる知識体系を相対化したり、超克したりするための知を生み出そうとする学問」¹⁾のことである。

議論のためにとりあげる具体的事例は、2020年の COVID-19 流行拡大時に COVID-19 患者治療専用病院として武漢市に建てられた「方舱病院」をめぐる情報のあり方と、早期に「原因不明肺炎」の流行を指摘していた艾芬医師（武漢市中心病院）をめぐる出来事についてである。

1. 方舱病院

中国政府は、COVID-19 の流行拡大への対策として、武漢市に臨時病院である「方舱病院」²⁾を建設した。2020年2月7日から患者を受け入れ、3月7日に最後の退所者を送り出すまで延べ1760人を受け入れた。この臨時病院は軽症患者用のもので、重症患者は別の病院に入院した。

患者受け入れ開始から5日目の2月12日、COVID-19 に感染した一人のイラストレーターが患者として入院した。彼女は、入院から5日目の2月17日に病院の様子を漫画に描いて SNS に投稿した。その漫画は、たとえば、病院で働く医師



写真1 方舱大白（人民網 2020年2月23日より）

を「方舱大白」と名付けて描いたものなどである（写真1）。「方舱大白」の「大白」とは、アニメ「超能陸戦隊」の人気キャラクターの一つである。方舱病院の医師は、白い防護服を着ているが、その様子が「大白」に似ていることから「方舱大白」の名前が付けられたのである。これらの漫画は、またたく間に SNS 上で拡散された。

そして、治療後の患者が医師から「検査の結果は陰性です」と告げられる様子を描いた漫画が21日に投稿されると、同23日に中国社会における権威的な主流メディア（以下、権威メディア）である「人民網」³⁾がこれを紹介した。それまで、

*キーワード：COVID-19、隠された声、災害民俗学

**上海大学文学院研究員

1) 島村恭則『民俗学を生きる－ヴァナキュラー研究への道－』晃洋書房、2020年。

2) 方舱とは、中国語でコンテナを意味する語である。

3) 人民網は、中国政府の重要メディアで、1997年1月1日に創設された。世界十大新聞の一つである。微博の「人民網」登録者は73,880,000人である。

権威メディアでは、感染者数、死亡者数の報道が主だったが、この漫画の紹介以後、「方舱病院」の内部の様子を楽観的に描き出す記事の掲載が増加する。

そこでは、病院内で行なわれた「お見合い」「子供たちの相互学習」「集団バレンタインデー」「寸劇」「広場ダンス」など、病院内の「楽しい」生活についての記事が次々と掲載された。また、同じく権威メディアである「人民日報」⁴⁾は2月13日に、新疆ウイグル自治区から来た医療支援チームによって患者たちにウイグル族の伝統舞踊が教えられ、医療チームと患者たちが一緒にこの踊りを行なっている様子を掲載した。これに対するネット上の反応は「まるで民族連合パーティーのようだ」というものだった。2月19日には、國務院新聞弁公室の「中国網生放送」⁵⁾が方舱病院の「舞台劇」に関する映像を発表した。3月9日には、共産主義青年団山東省委員会⁶⁾のTik Tok（モバイル向けショートビデオ用プラットフォーム）の「青春山東」が「すばらしい方舱病院」を紹介した。武漢放送局⁷⁾の総合チャンネルでは、「方舱病院では医療関係者と患者の誕生日を祝っている。みんなで誕生日の歌を歌っている。幸せなことだ」というタイトルでニュースを報道した。安徽放送局⁸⁾の公共チャンネルは「方舱病院の医師と患者と一緒に太極拳をして、和気あいあいとしている」というニュースを報じた。

これらに対して、ネットユーザーたちは「方舱病院は踊りの場と劇場になった」「方舱病院は隔離区か？それとも歓楽区か？」「いったい誰が隔離されているのか？ 方舱病院は楽しい場所だ！」「(病院外にいる) 私たちのほうが隔離されているみたいだ」「わたしも方舱病院に泊まりたい」といったコメントを寄せた。

この漫画を描いたイラストレーターによると、「方舱大白」は、この方舱病院での医師たちの大変な苦勞を見て、自分の力の及ぶ限りの方法で医



写真2 水蒸気のかかったゴーグル
(人民日報 2020年2月11日より)

師への感謝を表現するために描かれたものだった。たとえば、医師たちは防護服を着て、ゴーグルを着用して仕事をしていたが、ゴーグルのレンズには水蒸気がかかっていた(写真2)。彼らは目を横目にして、水蒸気のない隙間から書類を見るしかなかった。イラストレーターは、この医師たちの辛そうな様子をイラストにしようとしたのである。ただ、だからといって、ゴーグルの水蒸気や医師の疲れた様子を直接表現したわけではない。表現上は、一見、「楽観的」に見えるような描き方によってこの絵を描いたのである。しかし、それは決して COVID-19 の深刻な問題を隠ぺいしようとして行なったことではなかった。イラストという手法を用いて、医師たちの勇気を伝えようとしたにすぎなかった。

だが、ひとたびイラストレーターの手を離れると、この漫画の出現を契機に、方舱病院をめぐる情報は、文字どおり「楽観的」な情報として社会に広まっていった。方舱病院は、COVID-19 対策の臨時病院である。そこにいる人々は患者と医師である。そこは、生死にかかわる深刻な場所である。ダンスが行なわれたとしても、それは方舱病院のすべてではない。方舱病院は決して「楽観的」な場所ではない。

方舱病院は、軽症患者の受け入れを担当してお

4) 「人民日報」は、中国共産党中央委員会の機関紙である。

5) 「中国網生放送」は、中国インターネットニュースセンターの公式アカウントである。中国外文出版發行事業局が管理する国家重点ニュースサイトで、TIK TOK の登録者は 201,640,000 人である。

6) 山東省の各級団体の指導機関である。

7) 武漢放送局は武漢市政府直属の事業部門である。

8) 安徽放送局は安徽省政府直属の事業部門である。

り、多くの人がここで治療を受け、全快して退院していることは事実だ。しかし、ここに入院している人がすべて軽症で退院できたわけではない。重症化して、「金銀潭」「雷神山」「火神山」などの重症病院に転院していくケースも厳然と存在した。病院の雰囲気を楽しんで楽しいとだけ考えるなら、その理解は客観的ではない。しかし、権威メディアをはじめとする各種メディアは、そのことを受け手に想像させない方向で方舱病院を描き出していった。それに接した受け手は、方舱病院に対して偏った受け止め方をしていった。

「方舱大白」「お見合い」「子供たちの相互学習」「集団バレンタインデー」「寸劇」「広場ダンス」、これらはいずれも方舱病院での現実の一部にすぎない。しかし、これらが情報としてメディアに取り上げられると、方舱病院の現実についての他の情報を押しのけ、これらだけが肥大化して社会に流通するようになる。

このことは、COVID-19 という災害についての社会的記憶の形成に大きな影響を与える。権威メディアによる情報の変形が、災害に対する人びとの認識と理解を特定の方向に誘導してしまう可能性がある。

2. 隠された声＝消されたインタビュー

武漢市中心病院⁹⁾の急診科の主任である艾芬は、2020年3月2日の午後、南京路院区で「人物」のインタビューを受けた(写真3)。インタビュー記事は2020年3月10日にWeChat「人物」、および雑誌「人物」の微博に掲載された。しかし、掲載直後に、その全内容はネット上から削除されている。

インタビューの記事には次のことが書かれていた¹⁰⁾。

・2019年12月30日、艾芬は「原因不明肺炎」患者についての検査報告を受けとった。彼女はそこに赤いペンで「SARS 冠状ウイルス」と書き込



写真3 艾芬(那些年那些事網 2020年3月13日より)

んだ。

・その後、大学時代の同級生である同濟病院の医師に対し、微博で「原因不明の肺炎患者がいる」と相談した。その際、この赤い書き込みの入ったレポートを送っている。また自分の病院の医師たちの WeChat グループにも同時にこれを送信した。

・その夜、この報告は武漢の医師の間に広く伝わった。

・同日22時20分、病院から連絡があり、武漢市衛生健康委員会¹¹⁾からの通知が伝えられた。その内容は「原因不明肺炎の情報を勝手に伝えないでください。大衆がパニックにならないようにしてください。情報漏洩で大衆がパニックになったらあなたの責任を追及します」というものだった。

・同日23時46分、病院の監察課の担当者から「明朝、すぐに監察課に来るように」というメッ

9) 武漢市中心病院は、1880年に漢口天主堂病院として設立された病院で、現在、大型近代化三級甲等病院に指定されている。三級甲等病院は中國大陸の病院区分の中で最高位のレベルの病院である。

10) 以下に要約引用するインタビューの内容は「那些年那些事」<https://bwskyer.com/renwu-aifen-about-covid19.html>より。

11) 武漢市衛生健康委員会は都市衛生健康管理を担当する最高政府機関である。

セージが届いた。

・翌朝、艾芬は監察課に行った。このときのことを艾はつぎのように述べている。「今までにない厳しい叱責を受けた。彼は、武漢市の未来が私によって破壊されてしまうと書いた。これを聞いて、私は絶望した。私は、いつも勤勉に、すべて決まり通りに仕事をやってきたと思う。私は間違ったことをしたのだろうか？」

艾は、監察課の担当者に対してこう言った。「これは私がしたことだ。他の人とは関係がない。今の状態では職場での仕事ができない。しばらく休みたい」。だが、担当者はその申し出を拒否した。

艾芬は監察課を後にして自分の診療室に戻ると、すべての医師に対して、マスクと帽子を被り、消毒液でまめに手を洗い、白衣の下に防護服を着るように指示した。艾は、「私たちがこの状態を放置したら患者はますます増えていく」と考えた。一方、彼女の上司は「人と人との間で感染する現象は発生していない」と公言した。

雑誌「人物」からのインタビュー依頼を受け取った艾芬が、これに応じる旨の回答をメールで送信したのは3月1日午前5時である。その30分後の5時32分、彼女の同僚、甲状腺乳腺外科の主任江学慶がCOVID-19の感染により死亡した。3月2日に同院の眼科副主任の梅仲明も感染で亡くなった（2月6日に亡くなった李文亮医師もこの課に属していた）。

「人物」のインタビューがネット上から削除された後、中国のインターネットにはかつてない現象が現れた。インタビューの原文は、ネットユーザーたちによって、繁体字版、PDF版、ピンイン版、空白版、甲骨文版、金文版、英語版、ドイツ語版、満文版、チベット語版、写真版、天書版、倒置文版、倒文鏡像版、誤字版、火星文版、オーディオ版、虹版、乱文版、乱序版、点字版、電報版、モース符号版、二進法版、十六進法版、二位相コード版、古文版、四庫全書版、西夏文版、精霊語版、クリンゴン語版など30種類以上のバージョンに翻訳されて、各種のネットワークプラットフォームに発表された。

なぜ艾芬のインタビューが削除されたのか。な

ぜネットユーザーはそのインタビュー記事を必要としたのか？

インタビューは3月10日に発表された。この日までに中国では累計80000余件の感染診断が行なわれたが、当日、新たに感染確認されたのは24例だけである。中国のCOVID-19は効果的にコントロールされたといえる。このような状況の下で、疫病流行初期における政府関係者の問題点を指摘しているこのインタビューの公開は、社会の調和統一に支障があると政府筋から考えられた。インタビューは、病院や政府への信頼を動揺させてしまう。そのためインタビュー記事の流通を避けなければならないと考えられた。

一方、ネットユーザーを代表とする民衆は、国民としての「知る権利」を持っている。民衆は、COVID-19に関する客観的な真実を知りたがった。COVID-19は、誰もが直面したことの無いウイルスで、地元政府による流行コントロールが難しいことは確かである。しかし、情報を変形させることは認められない。地元政府は、国家、国民に対して事実を正直に報告し、周知すべきである。

多くの国民が、感染の初期段階では、権威メディアの情報に接し、「テレビの情報によると、この疫病は制御可能らしい。大したことはない。大丈夫だ」と考えていた。しかし、その後、感染の危機が自分たちに近づいてくるにつれて、民衆は、今回の疫病は、前回流行したSARSよりもはるかに悲惨なものであることを知った。そして正確な情報を求め始めた。

3月10日のインタビューが削除されたことから、権威メディアに対するネットユーザーの反発が高まった。ネットユーザーたちは、さきにあげたやり方を駆使してインタビューの内容をインターネット上に流出させ続けた。これに対して、ネットの管理者も妥協を余儀なくされ、インタビューの資料は保存された。ネットユーザーの行為は、疫病の制御、予防を阻害するためのものではない。次の災害を効果的に抑えるために、できるだけ正確な情報を入手しようとする行為なのである。

中国のCOVID-19公衆衛生危機については、国家制度、文化伝統、人口構造、医療資源など各

方面に及ぶ。したがって単独の変数で軽々しく評論することはできないが、次のことはいえるであろう。

一般民衆として、私たちは権威メディアによるニュースを通して外部の情報を得ている。疫病に対する理解は、権威メディアの放送に依存している。権威メディアは、重要な責任を負っている。もし、権威メディアにおける情報の選別が適切でないかたちで行なわれれば、国民の理解に偏差が生じる。権威メディアは情報を伝えるとき、慎重になる必要がある。

安徽省蚌埠市第一人民病院では、3人ずつ2組の医療人員を医療ボランティアとして武漢に派遣した。そして第1陣のボランティアは3月31日に蚌埠に戻った。このとき、病院が発信した公式WeChatのニュース写真では、全員がマスクをして写っていた。第2陣のボランティアは4月2日に蚌埠に戻った。そのとき、ニュース写真に写っていた3人のボランティアと市長、病院の指導者は全員マスクをしていなかった。

筆者は、なぜこの写真ではマスクをしている人の姿が写っていないのかについて、第2陣ボランティア参加者の一人である高徐玲看護師に質問してみた。彼女によると、関係者は全員マスクをしていた。ただ、この写真を撮影するときだけ、多くの市民に「COVID-19に打ち勝ったヒーロー」としての印象を与えるためマスクを外したのだという。彼女は、「このような質問をしたのは、あなたがはじめてではない。みんな、なぜマスクをしていないのかと聞いてきた」と言った。

この写真を見て、一部の市民は、「蚌埠市第一人民病院の医師や市長がマスクをしていないということ、もう中国の疫病は終わっているということだ。自分もマスクをし続ける必要はないのだ」と思ってしまったかもしれない。だが、マスクをしていないのは、その写真を撮影するときだけのことだった。医療ボランティアの無事帰還という朗報を伝えるニュースが、逆に民衆に誤報を

生み、さらにそれが原因で疫病が再び広がったとすれば¹²⁾、メディアの責任は重い。

3. 災害民俗学の課題

削除された艾医師の言葉は思い。「現場では、多くの支援医が心理的に耐えられない状況に追い込まれました。医師や看護師たちは泣いています。いつ自分が感染する側に回るかわからないからです」。私たちには、権威メディアが伝えないこうした言葉が必要である。悲しみに浸るためではなく、未来の解決策を探すために必要である。

さらに、私たちには、医師グループやボランティアグループの言葉だけでなく、さまざまな業種、様々な社会的立場の人びとの声も必要である。それらの言葉はいずれも災害の現実の姿を映し出し、人びとが災害について深く理解することを可能にするからだ。「もう一つの言葉」「隠された声」の存在は貴重である。それはかけがえのない収穫をもたらす。

権威メディアは、往々にして自己の立場に立って情報を処理するが、社会の進歩を促すために必要なのは多元的な情報と知識である。健全な社会は異なる言葉を包容する特徴を備えていなければならない。

民俗学の研究者は、疫病流行期間中に生まれた多様な言葉を記録し、分析すべきである。多様な声の集積により、疫病や災害に対して可能な限り全面的な認識を得て、科学的な民俗誌を書くことが課題である。私たちは、災害の経験を社会的な記憶、資源に転化し、将来の災害に備える必要がある。

権威メディアを相対化することは、権威を罵るためではない。人びとの経験を総括し、将来の方策を立てて、次の失敗を防ぐためである。COVID-20はいつ襲来するのだろうか？ それは、COVID-19の悲惨さを忘れたとき、消毒液をゴミ箱に捨てたときかもしれない。

12) 全国的な人口流動の回復、海外からの輸入性症例、無症状感染者などを考慮するとこの可能性は否定できない。

Authoritative Media and Hidden Voices around COVID-19 from the Perspective of Modern Vernacular

ABSTRACT

This study breaks the authority of the hegemonic and dogmatic system from the perspective of disaster vernacular studies (folkloristics) and formulates a transcendent knowledge system. COVID-19 spread throughout China in the early 2020, and the epidemic hit Wuhan the hardest; however, authoritative media overemphasized one-sided and relaxed information when reporting on Wuhan's Fangcang hospitals, resulting in people misjudging the severity of the epidemic. In addition, an interview with Doctor Ai Fen in Wuhan, who released the news about the COVID-19 epidemic early, was deleted from the Internet, and the relevant departments denied their own shortcomings during the epidemic. Hidden voices prevented the public from correctly understanding the disaster and the faulty decision-making of the relevant departments. This study thus advocates the notion that a mature and civilized society should have a sense of tolerance and be able to accept different voices because these fair and comprehensive voices can promote homo vernaculus to truly understand disasters and better confront and reflect on them.

Key Words: COVID-19, hidden voices, disaster vernacular studies